

## 農村腰痛のうつりかわりについて

西 能 正一郎 (富山県農村医学研究会)  
三 井 清、西 能 竝 (西能整形外科病院)

### 〔目 的〕

従来、農業は腰痛の起りやすい職業であると考えられていたが、戦後、農薬や耕耘機の開発、更に基盤整備にともなう種々の農業機械の導入により、その作業形式の変革はめざましく、今や土に手をふれない稲作りも考えられるようになった。この変革は、第一に作業時間の短縮、次いで作業姿勢の改善となつてあらわれたといえる。昭和31年、われわれは農業従事者の腰痛について調査して、日本農村医学会誌(5巻2号)に報告したが、15年後の今日、農業形態の変化が農業従事者の腰痛にどのような好影響をもたらしたかについて、再度同様な調査を行ない前回のデータと比較検討を試みた。

### 〔調査方法並びに成績〕

1. 外来腰痛患者の調査 最近、西能整形外科病院に腰痛を主訴として来院した20才以上の患者のうち、a：主として農業に従事している症例(農家群)、b：農業以外の症例(非農家群)の2群において、夫々500名ずつを無作為に抽出し、その年齢別、疾患別度数分布を調査した。=疾患別分類に際し、2種以上の疾患名のある例では、その中で最も腰痛の原因となる疾患名一つだけを取りあげることとした。また炎症性疾患や、外傷による疾患は除外して抽出した。

農家、非農家の別に男女別発生頻度を比較すると、表1の如く、非農家群の男女比は31年調査とほぼ一致する値を得たが、農家群で

表1：外来腰痛患者調査数( )内は31年度分

	男	女	計
農 家	143( 97)	357( 86)	500(183)
非農家	295(135)	205( 98)	500(233)
計	438(232)	562(184)	1,000(416)

表2：外来腰痛患者年齢別分類

	年齢	20	30	40	50	60才	計
農 家	男	9	12	24	46	52	143
	女	11	60	104	115	67	357
	計	20	72	128	161	119	500
非農家	男	92	56	57	42	45	295
	女	24	45	37	43	56	205
	計	116	104	94	85	101	500
計		136	176	222	246	220	1,000

は逆に婦人が多く、総数の70%以上を占めることを知った。この年齢別構成をみると(表2)非農家群は男女共に腰痛の発症は年齢との関連は少ないが、農家男子は年齢に比例して多くなる傾向が見られ、農家婦人群では、40才、50才台で異常に多く発病することが注目される。腰痛の原因疾患にはいろいろあげられるが、原因群別に4群に大別して年齢別度数分布を作ってみると表3のごとくである。31年調査の場合、腰部軟部起因性腰痛、特に筋、筋膜性腰痛症がどの群にも比較的多く見

表3：外来腰痛患者の疾患別分類

疾患名	農家 男						農家 女						非農家 男						非農家 女					
	20	30	40	50	60才	計	20	30	40	50	60才	計	20	30	40	50	60才	計	20	30	40	50	60才	計
軟部起因性腰痛 筋々膜性腰痛症 腰筋痛	3	5	11	16	11	46	5	22	31	20	16	94	49	29	34	19	8	139	11	16	15	17	11	70
椎間板性腰痛（じり）症 腰椎骨軟骨症 分離症 椎間板障害不安定腰椎症	2	3	7	17	19	48	1	21	53	63	29	167	13	8	11	8	20	60	4	13	11	15	17	60
根性坐骨神経痛 椎間板ヘルニア	4	3	6	11	11	35	5	15	15	18	0	53	30	21	11	12	9	83	9	16	8	7	3	43
その他 腰曲り、円背、骨粗鬆症 変形性脊椎症	0	1	0	2	11	14	0	2	5	14	22	43	0	1	1	3	8	13	0	0	3	4	25	32
計	9	12	24	46	52	143	11	60	104	115	67	357	93	59	57	42	45	295	24	45	37	43	56	205

られ、なかでも農家婦人群で非常に多かった  
ので、農村腰痛の主疾患は、筋、筋膜性腰痛  
症であろうと結論した。しかるに今回の調査  
では本症は農家群で、とくに農家婦人では少  
なくて逆に腰椎椎間板に起因する疾患群が全  
例の50%前後と多く、40才、50才台では特に  
多く、農村婦人の腰痛では注目すべき疾患群  
であることがわかった。腰椎椎間板性腰痛を  
証明するには、レ線の腰椎機能撮影に負うと  
ころが多い。31年調査では未だこの撮影法は  
開発されず、さらに一症例一疾患の統計方式  
が、筋、筋膜性腰痛症を合併している例をか  
くしてしまったためにこのような結果が出た

ものであろう。いずれにせよ農村婦人に課せ  
られる「かがみ仕事」が椎間板損傷の原因と  
なっていると思われる。

2. 農耕専従者の調査 31年調査と同一の  
新湊市作道部落を対象として、農耕専従者に  
a：腰痛アンケート、b：戸別訪問による臨  
床診断の調査を行った。しかるに農業の機  
械化によって余った時間を他の兼業に向ける  
ために専業農家が減少し、調査の結果、純粋  
の農業専従者が殆んどいなくなったので、耕  
作面積 100アール以上確保している家庭を一  
応農家と見做し、(総戸数 703戸中、対象戸数  
102戸) その家庭内での兼業の実態を個人別

表4 アンケート調査表

農作業に従事する順位	1 位		2 位		3 位		4 位		4、5位		計							
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計						
今まで一度も腰痛なし 最近一年間腰痛なし	13	4	17	4	6	10	17	10	27	8	6	14	2	5	7	44	31	75
年2～3回腰痛あり	27	18	45	26	29	55	53	47	100	5	8	13	2	2	4	113	104	217
小 計	40	22	62	30	35	65	70	57	127	13	14	27	4	7	11	157	135	292
月2～3回腰痛あり	10	6	16	5	11	16	15	17	32	1	2	3	0	3	3	31	39	70
いつも腰痛あり	2	2	4	0	3	3	2	5	7	0	0	0	0	0	0	4	10	14
小 計	12	8	20	5	14	19	17	22	39	1	2	3	0	3	3	35	49	84
計	52	30	82	35	49	84	87	79	166	14	16	30	4	10	14	192	184	376

に調査して農業専従者を抽出した。(a)アンケート調査 農村における腰痛の浸透度を知るための基礎的調査である。102戸約500名の対象者が得られその調査成績は表4の如くであったが、われわれは一家庭の構成員に農作業の労働量の多い方から順位を付け、第1第2順位に該当する178名を農業専従者と見做し60才未満の166名について検討した。

月2～3回以上腰痛のある人は21～22%で前回のアンケート調査で農家の腰痛発生率22%とはほぼ同率であった。また、その男女比は約7:3で女子に多く、外来統計と一致した結果を得た。年齢別構成は同様に40～50才台に集中する傾向が見られた。全く腰痛の経験のない人は15%、年に2～3回腰痛を経験する人は60%も見られ男女差殆んどなく、此の群には軟部起因性の腰痛が多かろうと推察される。(b)戸別訪問臨床診断の調査 同様に100アール以上耕作農家102戸について行ったが、調査の不便から悉皆調査ができず、専従者131名を診察したが、そのうち約3割に健康者が見られ、有患者のうち45.7%に軟部起因性腰痛を認め、20%強に椎間板性腰痛と診断できたものがあつた。レ線検査を行えばこの数値はもっと延びると思われるので、前記の外来統計をうらづけるものと解釈したい。

表5：戸別訪問調査表

	男	女	計
健康	10	27	37
軟部起因性腰痛	12	31	33
椎間板性腰痛	6	13	19
根性坐骨神経痛	3	5	8
その他	8	17	25
計	38	92	131

### 〔結論〕

1. 農業機械の導入は農耕専従者の腰痛を減少させるであろうと推定されたが、それは農耕専従者の数を少なくすることに役立つ面が多く、専従者個人の健康を改善するところまではいっていないようである。また改善されるとしても、機械導入以来の期間が過去の長い「かがみ仕事」の歴史に比してあまりにも短かすぎ、これからの将来に期待せねばならない。

2. 農業人口はますます女性偏重の傾向にあり、農村の腰痛は大幅に婦人層に移動しつつある。それは「かがみ仕事」の結果起つた腰椎椎間板性腰痛であることが多い。

以上

### 文 献

- (1)高橋喜美雄他：農業従事者の腰痛について、日本農村医学会雑誌、5巻、2号、65頁(1957)
- (2)高橋喜美雄他：いわゆる農夫症的症候群の統計的観察、日本農村医学会雑誌、5巻、2号、50頁(1957)
- (3)高橋喜美雄他：いわゆる腰曲りの研究(農村婦人の脊柱湾曲度並びに可動域の研究)日本整形外科学会雑誌、34巻、3号、1,274頁(1960)